

JIA NAGANO- KEN CLUB

Vol.84
2010
01.30

JIA 長野県クラブ

(社)日本建築家協会 関東甲信越支部 長野地域会

[http://www4.ocn.ne.jp/~jia-naga/
jia-naga@jeans.ocn.ne.jp](http://www4.ocn.ne.jp/~jia-naga/jia-naga@jeans.ocn.ne.jp)

建築の「知」について

西沢 利一

皆さん、あけましておめでとうございます。

丁度この文を書き始めようとしていたら、ニュースで大物政治家に地検の強制捜査が入ったと報じていました。大手ゼネコンにも入ったようです。昨年からいくつかの県の職員が集団で金銭物品の私的流用とか、官僚の天下り、渡り問題で2万数千人で12兆円も使われていたとか、日本列島は内部から揺らいでいます。新政権になって、外交問題も足踏み状態であるし大変な年になりそうです。

今まで日本を支えてきた諸制度が行き詰まっています。政治、経済、文化、教育など、先の見えない混迷が建築の場面でも顕著に表れて、我々の日常の業務に影響を与えています。特に建築生産の場合は、政治、経済の変化に直接的にかかわざるを得ません。建築芸術は文化だとはわかっていても、最近の魑魅魍魎の責任の押し付けは、文化などと言っていられない様相を呈してきていて、加えてこれも迷走している地球温暖化対策が拍車をかけています。こういった現状を見ていると、いわゆる文明が文化を食い潰し、人間の尊厳を危ういものにしている状況にはほとんど気付いていません。そうして欲目に見ても、不動産投資の極端な後退等によりとても建築生産が好転するとも思えません。この激変のなかで我々はどういった「知」を働かせるべきなのでしょうか。特に我が国の場合には、個人の力で生きるしか仕方のないシステムで出来上がっているし、特に我々の年代になると(還暦になった)不安の根深さが見えてきます。調子のいい時代でも先行きが不安だった、という事はいつでも短期決戦の繰り返しで生きてきたという事が言えます。建築についていって、建築とは制御された環境のなかにいる人々の生の動きを予測して、なお人々が自由に選択できるものの構築をし、望んだ状態をつくるプロセスの事だと言えます。ということは先見性の「知」がないと



上田情報ビジネス専門学校雑学講座



まち並みウォッチング in 松本



技術交流会

役目を負うことはできないとも解釈でき、では先を見ると言う事は、反転すると社会を予見させるモノをつくれる立場にいる事になりそうです。今まで必然是的に建築の専門「知」があれば仕事をしていられたが、今は誰も確信的にこの制御の枠を指し示してはくれません。居直り的に「CASBEE」や「長期優良住宅」みたいな朝令暮改的指針が示されると、耐震や省エネルギー、性能と言ったキーワードで、それこそ短期スパンで押し付けてきます。おそらくこういった状況は刻々と変化していくに違いないし、それに振り回される建築生産者はその度にウロウロするばかりです。建築は夢を持ったり希望を託す力をもっていたが、今は仕方なく社会状況に合わせてつくる間に合わせ的感覚があるのは何故でしょうか。この不安定な時間が、我々の心の内から尊厳を奪い取って行きます。「建築家資格制度」確立といつても、この訳の分からぬ雁字搦めの状況の中で、何を確立しようとしているのでしょうか。問題は「自己責任」と「社会責任」の共感対立がありながらなお焦点が合わないのは、建築にはいつも「建主」と「建築家」という共犯関係がありその間に誰も割り込めないし、その基本的矛盾が制度化と性格を異にしています。

最近の自己中心的な価値観の多様化は、我々に膨大なエネルギーの消費を強いてきます。価値判断が個別化され、選択を間違うと泥沼に入っています。こんな時代に何を持って対処すればいいのでしょうか。昔のように尊敬された(?)「知」の復権は可能なのでしょうか。今の所何も見て来ませんが、それでも生き続けていかなければならないし、生き人が為の「知」は、その社会性ゆえに我々に重くのしかかってきます。情報過多の現在、借りモノで無く心底未来の「知」を求める者のみ再び尊厳を語れる場に立てるような気がしていますが……。

まち並みウォッチング in 松本

広瀬 肇

数年前までは松本にはあまり縁がなく、どこがお城でどこが駅かもおぼつかなかったのですが、このところ少しばかり松本に出向くことが増え、おぼろげながら街の様子も判りかけてきたように思います。今回のまちなみウォッチングでは、松本の街に深く関わってきた方々のお話を聞きながら街を探索し、もう一步踏み込んで松本の街を眺めることができました。

松本市美術館に集合し、今にも降り出しそうな空模様を心配しながら中町方面へ向かいました。中町はご存知のように蔵造りの商店の続くまちなみ。さして目新しいことも無いかと思いながら、案内されるまま一步路地を入ると、その先には表通りの商店とはまた違った街の表情がありました。人気の無い小さな公園のブランコ、その脇の大きななまこ壁の蔵に石造りのアーチ…松本の蔵は長野のそれとは少し違って、ちょっとしたディテールに西洋風のテイストが感じられます。

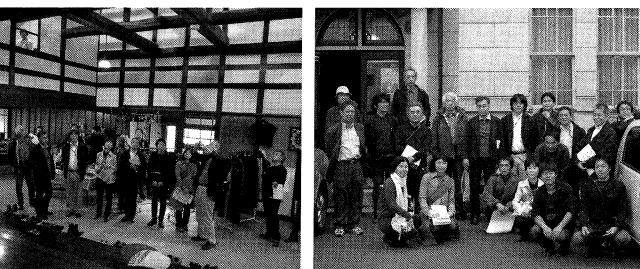
鴨が遊ぶ女鳥羽川河岸の石垣を横目に見ながら、かわかみ設計室に入る旧松岡医院の建物に着く頃には、雨が落ち始めていました。松本には大正時



代に建てられた擬洋風の医院建築が何件か残っており、旧松岡医院もその一軒です。丁寧に修復された建物を見て、使い続けることの意味を改めて考えさせられました。

雨足はますます強くなり始めましたが、かわかみ設計室で傘をお借りし、松本市下町会館へ。昭和初期に建てられた建物で老朽化によりファーサードのみを移築復元したものです。児野さんにその復元の経緯や苦労などをお聞きし、その内部の美しい螺旋階段も見せていただきました。

私たちの仕事のほとんどは否応無くそのまちのつくりに関わらざるを得ません。その関わり方はそれぞれ違うかもしれません、松本の人たちの真摯な仕事は今の松本にとって無くてはならないものと感じました。



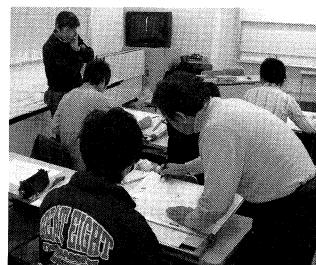
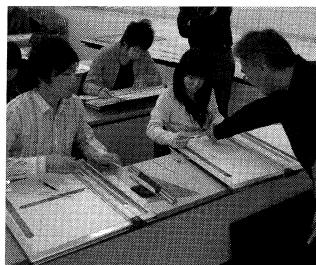
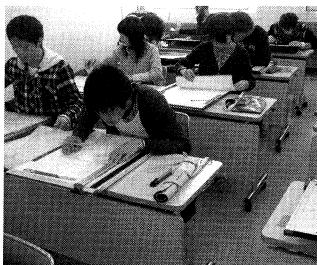
上田情報ビジネス専門学校 雑学講座

長島 三夫

専門学校の中でこの上田情報ビジネス専門学校は県内で建築関係の科を持つ唯一の学校になってしまいました。これも、建築不況からなる就職難が起因しているのだろうが、1、2年生合わせて20名ということは寂しい感じです。

そんな中、12月21日年末の慌しい中、HAL設計室の荒井洋さんの3時間に及ぶ講座が開かれました。平成21年度の日事連建築賞で会長賞を受賞し、アガス・アイでもHAL設計室が紹介され長野県では一番話題の建築家である荒井さんの学生時代から現在までの建築の歩みを1時間ほど熱く語っていただきました。きっと建築を目指す学生たちは心に響いたと思います。私にとってこれから荒井さんを見る目がどんどん尊敬の目に変わっていくこと間違いなしです。

その後、内観パースの実習。吉村順三さんの軽井沢の家が課題に使われました。私が学生の頃、1年間掛けて設計図のコピーから内観、



外観パース、最後に模型製作をしたバイブル的存在で現在私のパソコンの壁紙に設定してある建築物です。しかし学生の中に知っている人がいなかったのは寂しかった、これも時代なのかな? 荒井さんからこの建物を知っている人は“今日の授業を免除します!”といわれたものだから、せっかくの荒井さんからの直々のパース授業!これを逃したら大変!と思って知っていても知らん振りをしたんだと思います。

A2版の平行定規でパースを描くには大変だったと思いますが、学生たちは必死で自分のものにしようとしていました。残念ながら時間が無く完成を見ることが出来ませんでしたがどんなパースが出来上がったか見たいんですね。CADが中心になった建築界ですが、自分の想いを伝えるための手法としてまだまだ手書きは大切なんだ!と学生たちに理解してもらったと思います。2年生は卒業設計を控え大変な時期でしたが、表現方法が新たにひとつ増え役立つことでしょう。もうす

ぐ卒業設計も提出時期を迎えますが、楽しい作品が出てくることを期待するところです。何時の日かこの学生たちがわれわれを超えていくことでしょう。その日を少しでも遠くにするため、私たちも切磋琢磨していかなければ感じた一日でした。

UIA2011TOKYO大会準備特別委員会委員長に就任して

片倉 隆幸

「気候変動」や「人口問題」などの諸問題が、世界レベルで深刻化するなか、これから建築や都市はどうあるべきなのか?この問いかけに対して、UIA2011東京大会が掲げるテーマが「Design 2050」です。大会では、2050年そしてその先の将来像を描き出し、持続可能な未来に向けて世界の建築家が共有すべき新しいパラダイムについて語り合います。

「環境」「情報」「生命」の3つのサブテーマを、時間軸、同時代軸の双方から立体的に組み立て、複雑に絡まり合った現代の諸問題を多角的に考える機会を創出します。講演、シンポジウム、展示、イベント、ツアーを有機的に関連させて、世界の様々な分野から多様な参加者を得て、未来につながる多くの対話や出会いを生み出します。(大会趣旨抜粋)

さてこうした問題については地球規模で活動していかなくてはならず、世界中の人たちが知恵を出し合いながら向っていかなくてはならない身近な問題なのです。

日本の各地域から個性的な成果を広く示す場であり着実な声を届けていかなくてはなりません。長野県クラブの日頃の活動を通してまずはそのためのダイヤグラムをわかりやすく作成したいと思います。

国際的な問題の解決は地域の地道な努力の積み重ねからそれぞれの建築家の責任において実践していくべきであると考えます。是非とも一人でも多くの会員の皆さんの大大会登録をお願いいたします。

「信州の建築家とつくる家・第6集」発刊・そしてこれから。

林 隆

ちょうど第1集が発刊になった頃、私は設計事務所を開設しました。仕事の先が見えない不安な気持ちと闘いつつ日々を過ごしている時に第1集を熟読し、ぜひ自分もこのような活動をしている先輩方の仲間に入りたい、そしてこの本に掲載できるような仕事をしていきたいと純粹に思ったものです。自らの目標・指針でもあると感じ無謀にも入会をさせていただきました。

それから10年が過ぎ、「信州の建築家とつくる家・第6集」(JIA長野県クラブ・編、1500円)が、昨年12月1日に発刊となりました。37人の有志が、設計に携わった住宅の実例や自分の考え方を紹介しています。家づくりを考えている方だけでなく、建築を学ぶ学生・建築設計を志し日夜努力している若者・建築関係の仕事に携わる同業者にも、私たちの情熱を伝えることのできる本でありたいと思っています。

半年以上にわたる出版の準備期間中、「誰のための出版活動なのだろうか」ということを考えさせられる場面が何回もありまし

た。社会への情報発信という役割は言うまでもありませんが、私にとっては自己研鑽そして会員間の切磋琢磨の場としての意義も大きいと感じています。会議での熱い議論、忙しい中で出版委員が皆で役割を担うことにより生まれた仲間意識。そして各ページを見て素朴に感じ語り合う、自分の力量不足が露呈し焦る、そしてエネルギーが湧く、7集ではもっとがんばりたいと思う、この循環こそがまさにJIA長野県クラブの会としての魅力かと。出版活動のもうひとつ意義かと。

発刊後2ヶ月になろうとしています。折り込みはがきのアンケートにお答えいただいて、気になる建築家の資料請求もいただいている。また読者の方から早速、設計のご相談をいただいている建築家もいるようです。嬉しいことです。本の力は大きいです。これからも毎年発刊!これを目指していきたいものです。第10集・20集へと続く頃にはもう少しいい時代になっていることを期待しつつ、今はひとりでも多くの方にこの本を手にとっていただきたいことを願うばかりです。

愛と情熱の本づくり

今年度も「信州の建築家とつくる家・第6集」を無事発刊することができました。ありがとうございました。今回の号は、初めての毎年発刊となり、表紙や特集にも画期的な試みが盛り込まれました。苦労はしましたが、その分いい本になったと思います。

10年前の創刊時、私は建築家という存在を知りませんでした。取材を通して学びながらの本作りで、「愛と情熱の家づくり」という創刊号のタイトルも、みなさんの仕事に向かう姿勢の「共通項」でした。「愛と情熱」がほとばしっていたのです。

10年間、出版をお手伝いして今感じているのは、本というメディアは意外と家づくりに合っている、ということです。手に取る、ページを繰る、何度も開く、付箋をつける、人に見せる、会話する……本は古くてアナログなメディアですが、だからこそ人間くさい家づくりの流れに、とても自然に寄り添っている気がするのです。

また、JIA長野県クラブから見ても、出版事業は目に見えない大

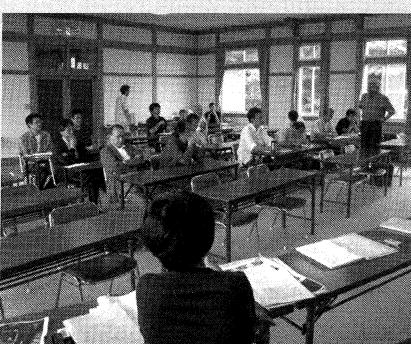
オフィスエム 寺島 純子

事な役割を果たしていると思うことがあります。内容や表現方法について、毎回様々な議論がされます。その最中は、まとまるのだろうか、と思うのですが、不思議なことに、みんなで話し合っているうちに、自ずとJIA長野県クラブのスタンスを確認し、結論が見えてくる…。最近では、一見遠回りとも思えるこの課程こそがJIAの本質だと思うようになりました。

新たに会に入られた方は、ぜひ出版委員会に出席してみてください。建築家とはどうあるべきか、何をしていかねばならないか、ということが見えてくるはずです。

さあ、みなさん、作ったら終わりじゃありませんよ! 本が、本当に届けたい人にちゃんと届いて、その先で心を動かし、その思いが返ってくるまで、届ける努力をしていくことが大切です。

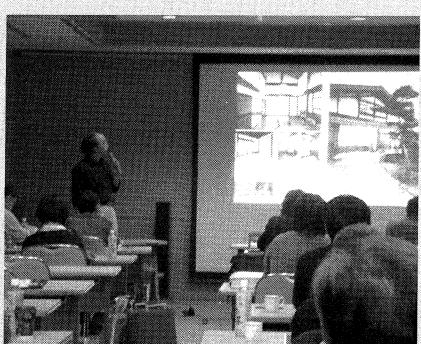
「愛と情熱の本づくり」今年もよろしくお願ひします。



出版委員会の様子



出版レビュー



出版レビュー

新春の集い～「2011年の建築家」を考える～に参加して

山口 康憲

2011年UIA東京大会開催まで2年足らずとなりましたが、関東甲信越支部企画のメインプログラムである「2011年の建築家を考える」の第1回シンポジウムが1月15日に「新春の集い」の企画として行われました。このプログラムはJIA先輩達の悲願であったUIA大会誘致の意義である建築家の職能を確立することを目的とした企画で、まさに大会のメインテーマとなりうる重要なものと考えます。芦原次期会長を進行役に、多くがJIA会員でもある建築諸団体を代表する豪華メンバーをパネラーに迎え

“日本の建築生産システムにおける建築家職能”をサブテーマに活発な意見交換が行われました。個人としての参加ですが殆どの方が各所属団体の長という立場なので、建築家あるいは設計者の職能、統括性を各団体がどのように考えているのかを把握できただけでも貴重な場であったと感じました。これを皮切りに大会まで6～7回のシンポが予定され、今年6月頃には長野でも開催される予定です。皆さんも自分のこととして捉え積極的に参加されるようお願いします。

賛助会だより

少ないエネルギーで快適な住環境を 屋外設置型ブラインド「エーデルヴァレーマ」日本オスモ(株)東京支社 西村 好弘

この度は、技術交流会にて製品紹介のお時間を頂き、誠にありがとうございました。

今回、環境をテーマに、弊社グループ会社であるエーデルジャパン(株)取扱いの屋外設置型ブラインド「エーデルヴァレーマ」を紹介させて頂きました。開口部から入る日射を誘導し、省エネルギーと快適な住環境を実現させるのが大きな特長といえます。

現在、日本では、温暖化対策=CO₂削減への流れをうけ、次世代省エネ基準を制定、住宅の省エネ性能(特に日射遮蔽・断熱)向上

を進めています。しかしドイツでは、すでに2002年以降、日本の次世代省エネ基準Ⅰ地域の約50%に値するQ値0.7W/m²K以下の厳しい「低エネルギーハウス基準」を設定。すべての新築建物に対しては、基準を満たしていないと建築できないかたちになっています。

そんな環境大国で近年急速に普及しているのが、この屋外設置型外ブラインドなのです。

ぜひご興味のある方は、お気軽にご相談頂きます様、お願い申し上げます。

「省エネ法改正と住宅・ビルにおける省エネ手法の動向」

この度は、技術交流会で発表をさせていただき、誠にありがとうございました。

また、常日頃から当社は空調・衛生設備工事におきまして、皆様に大変お世話になっております。あわせて御礼申し上げます。

今回は、大きなテーマといたしまして「環境」という事で、平成22年4月から改正になる省エネ法の動向。そして当社の技術研究所にて、研究・開発した省エネの商品の説明をさせていただきました。

省エネ法の改正については、現在は「事業場単位」での管理・報告から「企業単位」に変更になり、義務も当然きびしいものとなっております。そして政治においても、1990年比で温室効果ガス25%削

ダイダン(株)長野営業所 三浦 元

減する旨の方向が打ち出され「環境」の問題は各企業が避けて通ることのできないものとなっております。

当社としましては、今回紹介させていただいた省エネ商品を駆使し、客先のニーズに対応していきたいと思っております。ぜひ、皆様に省エネ商品を設計に織り込んでいただき、採用の機会を増やしていくだければと思っております。よろしくお願ひいたします。

今回、技術交流会に発表させていただく機会をいただき「JIA長野県クラブ」の会員の皆様と接する中で、今まで以上に身近に感じる事ができました。今後は何か役にたてる事ができればと思っております。どうかよろしくお願ひいたします。

株式会社デコス 藤田 隆太

この特徴として、木質系断熱材なので調湿する点が上げられます。先人達の知恵が培った家と湿気との共存、そして、現代の家づくりで避けては通れない省エネルギー化との連係。セルロースファイバーはこれらを無理なく繋げることのできる断熱材ではないでしょうか。

施工は乾式の吹込み工法(デコスドライ工法)により、手の届かない隙間までしっかりと充てんが可能です。壁の施工では、セルロースファイバーの密度が55kg/m³±5kg/m³となるように充てんし、経年沈下による断熱欠損の発生を防ぎます。断熱材が本来持つ性能を発揮させる工法で壁体内無結露20年保証を発行しています。

その他、防湿層不要の認定や防火構造認定などの充足を図り、デコスドライ工法をご採用しやすい環境を整えていく所存ですので、これからより良い家づくりに、皆様と共に歩むことができますと幸甚です。

「地球と人に優しい断熱工法」

この度は、JIA長野県クラブ技術交流会に参加させて頂きありがとうございました。

弊社は、新聞紙をリサイクルして作るセルロースファイバー断熱材の製造販売をさせて頂いております。製造販売といいましても、製造の段階で出来上がるセルロースファイバーはバラ綿状で、そのバラ綿状のセルロースファイバーを単に材料販売するのではございません。住宅の断熱は施工が大事、の考え方の下、専門スタッフが専用施工機を駆使して、建築現場での断熱施工までを皆様にご提供させて頂いております。

セルロースファイバーの原料となる新聞紙は、売店で売れ残った新聞紙や、ご家庭で読み終わった新聞紙など日本国内の新聞資源を活用しています。また、セルロースファイバーの製造エネルギーはとても小さく地球に優しい断熱材としての特徴を備えています。もう一

つの特徴として、木質系断熱材なので調湿する点が上げられます。先人達の知恵が培った家と湿気との共存、そして、現代の家づくりで避けては通れない省エネルギー化との連係。セルロースファイバーはこれらを無理なく繋げることのできる断熱材ではないでしょうか。

施工は乾式の吹込み工法(デコスドライ工法)により、手の届かない隙間までしっかりと充てんが可能です。壁の施工では、セルロースファイバーの密度が55kg/m³±5kg/m³となるように充てんし、経年沈下による断熱欠損の発生を防ぎます。断熱材が本来持つ性能を発揮させる工法で壁体内無結露20年保証を発行しています。

その他、防湿層不要の認定や防火構造認定などの充足を図り、デコスドライ工法をご採用しやすい環境を整えていく所存ですので、これからより良い家づくりに、皆様と共に歩むことができますと幸甚です。

■今後の行事予定

2月20・21日……………保存問題山梨大会
2月27・28日……………第4回「建築祭」

12月1日に「信州の建築家とつくる家第6集」が発行されました。
購入ご希望の方は、事務局までご連絡ください。

■新入賛助会員のお知らせ

日本エンバイロケミカルズ(株) <http://www.jechem.co.jp/>
〒541-0051 大阪市中央区備後町3-6-14
アーバネックス備後町ビル
(担当者)保存剤事業部木材保存剤営業グループ
西日本営業チーム 柏原 享

■会員のお知らせ

◇祝!受賞
・平成21年度日事連建築賞 日事連会長賞
荒井 洋「小澤メンタルクリニック」
・2009年度グッドデザイン賞 戸建住宅・集合住宅部門
林 隆「黒い筒の家」

編集後記 2010年新年を迎ました。期待されてスタートした新政権ですが、マスコミは揃って無責任に政党いじめに躍起になっています。日本列島は内部から揺らぎ、外交問題も足踏み状態、今まで日本を支えてきた諸制度が行き詰まっています。政治、経済、文化、教育など、先の見えない混沌が顕著に表れて、日常生活に影響を与えています。こんな時こそ、様々な場面において基本・原則に立ち戻り、腰を据えて一歩でも前に進みたいものです。……………勝山 敏雄

皆様からの投稿をお待ちしております。誌面へのご意見もお寄せ下さい。

編集人／勝山敏雄 発行所／JIA長野県クラブ 長野市南長野妻科426-1 長野県建築士会館内 TEL:026-232-3897 FAX:026-232-5303
発行人／赤羽吉人 URL <http://www4.ocn.ne.jp/~jia-naga/> E-mail jia-naga@jeans.ocn.ne.jp